

# 中国人の日本観——周仏海

蘇 德 昌\*

中國人的日本観——周佛海

蘇 德 昌

## 要 旨

周仏海の一生は波瀾万丈の50年であった。20代はマルクス主義に走り、中国共産党の創立にまで参加し、30代は孫文の三民主義を信仰し、その著述と宣伝に没頭し、40代は和平運動に身を投じ、漢奸になり、悲劇の最期で幕を閉じた。日中戦争が勃発し、戦火が華北から華中・華南へと急劇に燃え広がるにつれ、彼は日本の国力を過大評価し、中国は人・物・組織、どれを取っても、日本に及ばないし、国際情勢も中国には不利で、孤立無援の状態である。故に、日本と戦えば絶対に負ける。中国を救うには和しかない。という動機から日本を信じ、日本人と手を組み、日本軍占領下の汪兆銘傀儡政権作りに東奔西走し、その中堅になるが、間もなく、裏切られたことが分かり、日本・日本人不信感に陥り、絶望する。最後のあがきも功を奏さず、獄死する。

## I. 大漢奸

13億もの民が居住する、広大な中国大陸に共産党政権ができてから55年過ぎたが、東欧共産圏諸国やソ連が崩壊しても、各国が経済制裁を加えても、いわゆる反体制派や世界のマスコミが騒いでも、崩壊どころか、そのかけら、気配さえも見せない。まだまだ続きそうである。色々なことが原因していようが、その一つに中国人の意識、或いは潜在的な意識がある。中国人のものの考え方、行動の仕方の根底には儒教というものがある。2千年以上に亘って、それは思想・文化・風俗・慣習として、中国人の血や肌に染み込んでいる。その儒教がどうもそれに真っ向から反対して立ち上がった共産党政権にも合うようである。家族の間は親子の親、夫婦の別、長幼の序の関係にあり、それを家庭から外に拡大して行った場合は朋友の信である。更に範囲を大きくし、村から地域、そして国のところまで行っても、その関係は変わらず、親子の親が君臣の義と言い方を変えただけに過ぎない。封建制の社会に於いて、秦の時代から清朝に至るまで、易姓革命で朝廷が変わっても、人口の大多数を占めるのはいつも農民階級であり、底辺にあって、土台となっている。その上部にあるのが少人数の地主階級で、皇帝及び朝廷はその代表者である。国

平成15年9月26日受理 \*教養部

民党政権になって、地主階級と並んで官僚買弁資産階級も農民階級の上に居座るようになったが、中国社会が血統を重んじ、宗族社会であることには何らの変わりもない。儒教はこのように人間の社会での関係を律するものだけでなく、又倫理道德の手本でもある。共産党政権は封建制打倒や、言うまでもなく帝国主義打倒も旗印にして、国民党政権を台湾に追いやり、打ち建てた政権であるが、労働者階級が諸階級の指導者階級としてリーダーの地位を占め、農民階級をその同盟軍に置き、小資産階級を連帯の対象にし、民族資産階級を闘争・改造の標的にする、つまり理路整然とした秩序を保つという点ではそれまでと大差がないのである。諸階級の社会での位置は平等ではなく、支配・被支配の違いがあり、国家権力との距離も等距離ではなく、労働者階級の前衛と自任する共産党が終身与党である。中国人は「子・婦・幼」として、「親・夫・長」に従うことに慣れており、従順に共産党の一党独裁に甘んじるまでは行かないにしても、そう軽々とは反抗し、自らの地位を変えようとしないのである。孝は道之美であり、百行の本である。親孝行する者に悪者はいない。それと同じように、皇帝・領袖に命を捨て、自分自身を無にしてまで忠誠を尽くす。と同時に、勿論のことながら、慈しみ、思いやりのような道德観念も美德として崇められる。要するに、仁、忠恕、これが儒教の言う倫理道德の根本である。中国共産党が率いる軍の最高司令官として名を馳せた朱徳将軍が国民に尊敬され、親しまれるのは彼が親思いであり、孝行息子であるということと無関係ではあるまい。プロレタリア文化大革命中に毛沢東一派が執拗に、嫌らしくてぞっとするようにまで国民に、国に、共産党に、毛沢東に忠誠を尽くすように強制し、紅衛兵のような若い世代がこれ又天真爛漫もいいところ、無我夢中になって、毛語録を高々と掲げながら、「毛主席万歳！」と叫んだその背景には儒教の忠孝の意識が色濃く滲み出ている。儒教の本家本元であり、その儒教の影響が未だに中国人の意識に根強く残っているからこそ共産党政権はなお崩れないのではなかろうか。

中国人も人間である限り、家庭内で夫婦喧嘩もすれば、親子喧嘩も兄弟喧嘩もする。但し、そういった家族の間の感情の摩擦も、他家との利害の衝突が起こった場合は家族一致団結してそれに当たる。他人と組んで親族をやっつけるなんて考えられないことである。大逆無道とは正にこれを指して言っているのである。そこから広がって行き、宗族・村・地域に背くのも悪徳とされる。筆者の父は数学者であったが、共産党政権樹立直後、政府より勤務先の上海の大学から北京へ赴き、中国科学院数学研究所を創り、所長になってもらいたいと言われた時に、それこそ共産党政権へのデビュー、栄進栄転の絶好のチャンスなのに、父は上海を離れたら、「華東の父老兄弟に申し訳ない」と言って、きっぱりと断った。それが又新聞の第1面に載ったので、中国、特に東部地方での父の名声が一層高まったのを今でも覚えている。民族も国もみな家族、家の延長であり、その利益を守るのが人間としての本分である。孫文の「驅除韃虜、恢復中華」が漢民族の共鳴を呼び、辛亥革命を成功に導いたのも漢民族の一体感に訴えたからである。裏切り者・売国奴に対する嫌悪・憎悪の感情は想像を絶するものである。民族の英雄岳飛を絶対崇拝するのに対し、奸臣の秦檜には吐き捨てるような素振りを見せる中国人には我ながらそこまでという感がする程である。林則徐と言うと、褒めちぎり、李鴻章と言うと、そっぽを向く。一世紀二世紀経ってもイメージは変わらない。「愛国者」というレッテルは最高の賛辞でもあり、又最大の免罪符でもある。どんなに酷い悪事を働いても、愛国者であれば大丈夫である。共産党政権にとっ

て、人民を圧迫・搾取する階級に属する人物は階級敵であるはずであるが、国を愛する者は「愛国民主人士」として保護される。日中戦争勃発後、共産党がそれまで根拠地で実施していた農地改革の方針・政策を中止し、地主に小作料・利息の引き下げを要求する程度に留めたのもその理由からである。日本という外敵の襲来を前にして、大敵である地主も小敵に格下げするか、或いはいっそのこと味方にし、手を組んで「一致对外」という戦法である。1936年12月12日に起こった西安事件も同じである。共産党が周恩来を派遣し、拘束した蒋介石を南京に返すように張学良と楊虎城を説得したのであるが、蔣を釈放して返した方が国民党と共産党の連合・合作による抗日に有利であるという考えからである。共産党がよく使う「統一戦線」という言葉及びそのやり方は共産党に限らず、他にもある。利害関係の大小、緩急を考慮し、全部の敵を一度に敵に回してしまわないで、先ず一部の敵と連合して他の敵を消滅してから、その一部の敵と戦う。敵を一つ一つ、一步一步撃破して行くのであるが、共産党の場合は利害関係に加え、儒教の論理も利用する。「我々は一家の者、同族だ」というのが共産党の口癖である。この「族」の中身、範囲も宗族、家族、親族、部族、種族、民族と色々あって、一番広い範囲に至っては人種・言語・文化もほとんど関係ない50幾つかの民族をひっくるめて「中華民族」と言う。共産党政権がアメリカを前にして国民党政権に「我々はみな中国人であり、炎黄の子孫である」というのがその手法である。

それ故になおのこと、「漢奸」という罪名程重みのある罪はない。強盗・放火・殺人は勿論のこと、普通で言うスパイ・裏切り者・売国奴でさえもその足元に及ばない。日本人が連想する明智光秀・尾崎秀実等のイメージの比ではない。漢奸の罪を着せられ、レッテルを貼られたら、本人もその家族も一生日の目を見ることはできない。普通の政治・思想犯と違い、体制・政権が変わっても、その罪はなくなる。筆者の本務校であった上海の復旦大学史学科に学問的にも人間的にも大変立派な歴史学者がいた。日本に留学し、東京大学と京都大学で勉強したことがあるが、戦時中に汪兆銘南京国民政府の日本駐在大使館に勤務したことから、漢奸の罪に問われた。国民党政権下でもうだつが上がりなかつたし、共産党政権になってからも、真面目に働き、おとなしく、小さくしていたのに、政治運動の度に引っ張り出されては槍玉に上げられた。年を取り、教え子がどんどん昇進し、助教授・教授になっても自分は戦階のない平の教員のままであった。教壇には立てない。論文を書いても発表できない。学会にも出られない。大学の隅にある部屋でひたすら資料を整理するだけであった。

周仏海はその漢奸で、それも巨奸である。

1946年10月8日に発表された首都高等法院での彼の起訴状に掲げられた十大罪状は次の通りである<sup>1)</sup>。

- 一、愛国心を売り捌いて敵国に加盟したこと。
- 二、偽政府行政院副院長、偽財政部長等の要職をつとめ、本国に反抗したこと。
- 三、荒唐無稽の言論を發表し、その罪を正当づけたこと。
- 四、民国三十一年（昭和十七年）七月十二日日本を訪問し、敵国に媚を呈したこと。
- 五、中日借款条約を締結し、中国経済を破壊せしめたこと。
- 六、法幣を回収し、金融を攪乱したこと。

- 七、中日基本条約、中日同盟条約等売国条約を締結したこと。
  - 八、偽満州国を承認し、かつ訪問したこと。
  - 九、偽幣〔儲備券〕を乱発し、中国経済を破滅に陥れたこと。
  - 十、物資の買集めを行ない、これを囤積して敵国のために利し、併せて民生を疲弊のどん底に陥れたこと。
- そして、11月7日に宣告された判決主文は次の通りである<sup>2)</sup>。

「敵国に共同通謀し、本国に反抗を図った罪で死刑に処す。公権は終身剥奪し、財産は家族の必要生活費を除き全部没収する。」

但し、判決理由書の最後はこうなっている。

「ただ個人の政治的野心を果たさんがため、国家民族の存亡を顧みなかったのである。もし中央が徹底抗戦を堅持し、最高統率部の計画が不動のものでなかったなら、我国は永久に地歩を回復することが出来なかった。正に許すべき何物もない。たまたま小功をささげているが、この大罪は消し難く、いろいろ睨み合わせて見ても、寛大な処置には出られない。」

裁判は一応これで終わったが、翌年の3月26日に次のような国民政府令が發布された<sup>3)</sup>。

「該犯人は民国三十年以降しばしば自首を申し入れてきたが、公式に許されるに至らなかった。三十四年六月十九日さらに軍事委員会調査統計局に自首の申し入れを行なったため、その実現を行なうことになり、同局より犯人に通知した。もし盟軍が江蘇、浙江沿岸に上陸すれば、これに呼応することになっていたもので、敵寇投降前後よく京滬杭一帯の秩序を維持し、人民を塗炭の苦みから救い、さらに功績を加えた。……よってここに約法第六十八条に基づき犯人周仏海は、原判決死刑を減じて無期懲役とする。」

「蓋棺論定」、普通人の評価というものには死後はじめて決まるものであるが、愛国か売国かは、特に中国に於いてはあまりにも重大な問題なので、死を待たずに一遍に決まる。悪、それも最悪である。何しろ首都高等法院の判決及び国民政府令であるので、それを覆すのは容易でないし、犯罪事実は正にその通りである。要は、周仏海は何故に斯様な行動行為を取ったのか、その根底にはどのような日本観が潜んでいるのかということやはり追究せねばならぬことではなかろうか。

## Ⅱ. 売国行為

1946年10月21日首都高等法院第一法廷で開かれた周仏海の初公判で、裁判長と被告の間に次のような質疑応答があった<sup>4)</sup>。

問 被告は明らかに敵に通謀し、本国に反抗を企図したものであるが、未だにその考えが間違っていないかと思っているのか。

答 南京に在ってはただ奮闘であり、「敵に通謀して本国の救済を企図した」ものだと断言し得る。身は匈奴にあっても、心は漢にあり。敵に通謀し、本国に反抗したという罪名は、承認し得ないものである。

閉廷寸前、周仏海は頭を振り立てながら大声で叫んだという<sup>5)</sup>。

「通謀敵国、凶謀救済本国」「通謀本国、凶謀反抗敵国」

裁判長に真っ向から反論している。内容も正反対で、表現形式も「対仗」まで使っている。

彼の言い分は別として、事実は起訴状の言う通り非常にはっきりしている。

1938年2月、国民政府外交部前亜州司長高宗武と対日和平に就いて連絡を取る。

1938年10月、国民党中央宣伝部香港駐在特派員梅思平と密議。

1938年11月、高宗武・梅思平に指示し、陸軍省軍務課長影佐禎昭・参謀本部支那班長今井武夫との上海東陸戦隊路土肥原公館での会談に臨み、日華協議記録及同諒解事項並日華秘密協議記録に調印。

1938年12月、汪兆銘の重慶からの脱出、ハノイ逃亡を手助けし、その和平通電に賛同し、公式に和平救国運動に身を投じる。

1939年6月、汪兆銘に従い、日本を訪問。

1939年12月、高宗武・陶希聖・梅思平を率い、影佐禎昭・須賀彦次郎等と会談、日華新関係調整要項を決定。

1940年3月、借款条約に調印。

1940年3月、日本軍占領下の南京に日本の傀儡政権南京国民政府を樹立し、相前後してその行政院副院長・行政院長代理・軍事委員会副委員長・財政部長・警政部長・上海特別市長・中央儲備銀行総裁等の要職に就き、外交・軍事・警察・特務・財政・金融・人事の権力を手中にして、政権の中枢部に権勢を欲いままにし、陳璧君・陳公博を凌いでNO.2の地位に申し上がる。

1940年11月、日華基本条約調印に参加。

1942年7月、日本を訪問。

1943年1月、南京国民政府对米英宣戦布告。

1943年4月、満州国を訪問。

1943年10月、日華同盟条約調印に参加。

周仏海のこの何年間かの足跡を見れば、彼が日本に通謀した事実が救国なのか売国なのか一目瞭然であるが、その詳細を調べれば彼の心情、苦心、そして日本に如何に愚弄され、二進も三進も行かなくなり、必死になってあがく姿がよく分かる。

支那事変勃発後、彼は高宗武・陶希聖・胡適等3人と、低調クラブと言われる程、戦争には悲観的であったので、当然のことながら、汪兆銘に共鳴、同調し、和平運動に参加して行った。汪は始め国民党内で和平論を唱えていたが、国内世論、文化人、国民、共産党の反対もあり、蒋介石がなかなか受け入れてくれないのを見て、日本未占領地域の雲南省、四川省、広西省、広東省の一部を地盤に国民政府とは別に和平政権を作り、いわば日中提携の「手本」を国内外に示し、「外」から蔣に和平に踏み切るよう迫り、日本との全面的和平、提携を実現しようとした。ところが、汪には地盤も人脈も大義名分もなく、結局は日本軍の占領地域に傀儡政権を創らざるを得なくなってしまった。汪兆銘、周仏海一派がいくら抵抗しても、占領地である上海、南京に身を寄せているかぎり、せいぜいあしらわれるだけであった。

日華協議記録や近衛声明、汪兆銘訪日時道の義的、大乘的等の美辞麗句に包まれた空手形、空証文を信じる方がいけないのであって、日華協議記録で一安心し、日支国交調整原則に関する協

議会で日本側が提出した原案の「大変広範囲に亘る点」で、「驚愕」<sup>6)</sup>しても、以下のようなことは厳然たる事実であり、日本は始めからそのつもりでいた。日華協議記録が調印された10日後、協議会が開かれる11ヶ月前に御前会議は既に日支新関係調整方針たるものを決めていた。

新支那の政治形態は分治合作主義に則り施策する。北支及蒙疆は国防、経済上の日支強度結合地帯にし、他に蒙疆地帯は又防共軍事、政治上の特殊地帯とする。揚子江下流地帯は経済上の日支強度結合地帯にし、南支沿岸特定島嶼には特殊地位を設定する。上海・青島・廈門は特別行政区域とする。

満州国を承認する。

新中央政府及強度結合地帯、その他特定の地域に顧問を派遣する。

北支及蒙疆の要地に軍は防共駐屯する。それ以外の軍はなるべく早急に撤収する。但し、北支及南京上海杭州には軍は治安駐屯する。揚子江沿岸特定の地点南支沿岸特定の島嶼に艦船部隊を駐屯する。

日滿に北支及蒙疆資源の開発利用の特別の便益を与える。

妥当な関税を採用する。

全支に於ける航空、北支の鉄道、沿岸の海運、揚子江に於ける水運を日支協力とする。

協議会で、周仏海等が悲鳴を挙げたが、時期既に遅すぎた<sup>7)</sup>。

「華盛頓会議に際し門戸開放の原則が約束されたるに其の後日本のみが門戸を閉められたるが今度は逆に日本が地位を代り列国を閉め出すのみならず中国人をも閉め出すに非ずや」、「人心把握上障害あり」、「工作上重大の影響あり」、「幹部同志の間に於て通過困難なり」、「同志幹部の心理を尊重することを要す」、「重慶を出て一年足らずして条件が過重さるるは著しく吾人の意気を阻喪せしむ」、「国民は平和運動に失望し我々も苦境に陥る」、「精神上必要なことは日本側は戦勝国と思はずつまり中国を戦敗国と考へずして和平を行はざるべからず。然し一般中国民衆は敗れたるを以て何を云ひ出すか計り難しと云ふ心理状態にあり」、「見る人に依り全部日本に奪はるる様に感ずるならん」、「中国の国防資源が殆ど北支に集中し、全部日本に渡せば残りは無き」、「当方の一般人の最も恐るるは……幼稚なる中国資本駆逐せらるることにあり」、「華北農民を殺すが如き事なき様注意を願ひ度」、「同志に説明するに際し通過を容易ならしむる為日本に全部を握らるるものに非ずとの意味を加へんとするものなり」、「華北に属するものを蒙疆に中支に属するものを華北に属せしめる如く之を雜然とする時は中国民の感情上又紛争を惹起するに至るべし」、「妥協の名人たる小生も認むる事極めて難く」、「我方は忍ぶべからざるを忍び」、「我々の内部も反対の態度が強く同志に大なる反対あり」、「小生は妥協案を多く出したるも今日は何れも失敗せし」等々。

日本側首席代表の影佐禎昭も「この条件で汪政府が民衆を把握する可能性ありや」という参謀本部戦争指導班の堀場一雄の問いに対して、「不可能である」と答えているし<sup>8)</sup>、「日本政府もまたこれはどうしたというのだ。近衛声明以来の成行きを知らない筈はないのに、こんなことでまとまるわけではないじゃないか！」と満面に紅潮を呈して怒った。須賀彦次郎も「これを汪兆銘側に押しつけたんじゃ、今までわれわれが言っていたことは、全部嘘になるじゃないか！」と叱りつけるように言った程である<sup>9)</sup>。「かりに、この原案を実行すれば華北は事実上中国から独立し

た形になるし、さらに南に飛んで海南島も日本海軍のものになる。およそ世の中にこれ以上の傀儡政権はない」と代表の犬養健も話した<sup>10)</sup>。それを汪兆銘、周仏海は最終的に飲み込み、承諾したのである。

蒋介石は翌年1月23日全国民に告ぐ書を発表し<sup>11)</sup>、汪兆銘一派の唱える善隣友好は日支合併であり、共同防共は永久駐兵であり、経済提携は経済独占なりと批判した。

### Ⅲ. 和平の動機

周仏海は1939年7月22日から24日にかけて、上海の「中華日報」に「回憶與前瞻(回顧と展望)」<sup>12)</sup>という長文を発表した。彼の「通謀敵国」の動機を知る上で貴重な資料であるだけでなく、彼の日本観も垣間見ることができる。

彼は何故に汪兆銘に追随し、和平救国運動に身を投じたのか。共産党或いは悪意のない人だったら、

「第一に、私は従来親日派ではなく、日本人と付き合わないで、今回の行動は日本人から唆されてやったのではないと思っている筈である。正にその通りで、その観察は正しい。私は日本に行き、7年も勉強したけれども、なんと日本人の友達是一人もいない。普段は教室と図書館に通うだけで、日本の学生とは交際を全然しなかった。帰国してから、日本人の奥さんを持っている友達が二人いて、時には彼女たちと顔を合わせるが、それを除いて、16年もの間に一人の日本人とも会ったことがない。私のような日本留学経験者は本当に珍しいと思う。故に、私は今まで日本と結託したことなどなく、今回も誘惑されたのではないという見方は正しい。」

確かに、彼は日本・日本人・日本文化を愛する親日派ではない。日本が好きで、日本に加担したのではないし、もともと加担などしていない。日中戦争中、親日と言えば漢奸、漢奸と来たら、親日と見る人が多いけれども、それは間違いである。

「第二に、私が和平に奔走したのは個人の問題によるものではなく、きっと一つの考え、定見、主張があつてのことであろうとする見方である。これも正しい。」政治的社会的地位や名誉のためではないし、死ぬのが恐くなつてのことでもない。ちょうど逆である。

全面的抗戦を唱えるのは蒋介石を倒すためであつて、喜ぶのは共産党及びロシアである。彼は若き頃、京都大学で河上肇の影響を受け、中国共産党の第1回全国代表大会に出席し、副委員長にまで選ばれている。委員長は陳独秀であつた。3年後に脱党し、国民党に入党、以来三民主義の信徒になる。

彼は国内外の情勢・時局をよく分析し、日本に対して、三つの可能性があるかと判断する。一つは、戦えば必ず大敗し、和すれば大乱を起こす。一つは、和すれば必ず大乱を起こし、戦っても必ずしも大敗するとは限らない。一つは、戦えば必ず大敗し、和しても必ず大乱するとは限らない。そして、彼は3番目の可能性を取るのである。

戦えば必ず大敗するを論じるところで、彼の日本観がはっきり見えて来る。

「最後の勝利を主張する者でも中国は人の要素、物の要素、組織の要素、何一つ取っても日本と比べることができないということを分かっているが、なお世界の情勢は変わるだろう、日本

も内部から崩壊するだろう」との幻想を抱いている。ところが、事実はどうであろう。国連は道義的な援助やちょっとした援助しかくれないし、米英の対日経済制裁も雀の涙程のものであるし、ロシアも飛行機や大砲を少し換えてくれるだけである。米英と日本との間に戦争など起こるはずがない。中国との間、「もしも戦争が長引けば、言うまでもなく、日本は益々困難に陥るであろう。但し、日本が痒く感じた時、中国は既に痛みを感じているだろうし、日本が痛みを感じる時には中国は既に痛さに堪えきれずに死んでいるであろう。……日本は崩壊しないとは言えないが、その前に、中国は崩壊してしまっているであろう。」

彼は日本と中国の国力を比較し、日本と組むことにしたのである。汪兆銘はそれだけでなく、日支提携、共産主義反対は三民主義に沿うものであり、孫文の意思でもあると見ていた。たとえ満州国の問題に就いてもそうである。「満洲については、孫文先生の大正十二年、神戸における講演に照らしても、これが独立を承認することは、孫文主義に反するものではない<sup>13)</sup>。」

和すれば、共産党は必死になって反対するであろうが、政府は動揺しないし、抑える力も十分なので、天下大乱にはならないであろう。戦えば必ずロシアと連合になり、そうなれば必ず容共になる。と、周仏海の念頭には常に共産党・共産主義があり、反共・防共が抗日よりも上位に置かれている。

時局は險悪になる一方である。1937年7月に天津占領、8月に北京入城、8月第2次上海事変、張家口占領、9月大同・保定占領、10月石家荘・包頭陥落、11月太原陥落、12月南京・濟南陥落、1938年1月青島陥落、5月徐州陥落、10月広東・武漢三鎮陥落、1939年2月海南島占領、3月南昌陥落、6月汕頭上陸。彼は抗戦の自信を完全になくし、「抗戦を続ければ滅亡する」、「和平の道こそ、国を救うことができる」と堅く信じるようになるのである。

長文の最後に、彼は1938年12月22日の近衛声明を信じ、その和平の条件は亡国の条件ではない。人々は日本人は信用できない、直接交渉したら、絶対騙されると言うが、近衛声明の各点は五相会議、閣議、御前会議の決定を見て、世界に向かって公表したものである、信頼できないことはない。「将来交渉が正式に開始された場合、日本は決して近衛声明の各点以外にその他の要求を出してくる筈がないと私は信じて止まない。」中国の9割の人が和平に賛成し、又9割の人が日本の誠意を疑っているが、自分自身何ヶ月か日本人と接触して感じたのは日本の現当局者及び識者には誠意があるということである。和平で以て国家の生存と民族の独立を保障しようと声高々と呼び掛けるのである。

ところが、それがなんと東の間のことで、彼が言ったこと、信じたことが悉く破られ、日本・日本人は彼をも裏切るのである。

#### IV. 不信感と絶望

1940年3月30日、汪兆銘南京国民政府は遷都式典及び各院、部、会の長官就任式典を行った。周仏海はその日の日記にこう記している<sup>14)</sup>。

「余の理想としていたことが実現したのであり、人生の一大快事である。思えば一昨年の四月に思平と時局の收拾方法について議論した時に、余は三民主義、国民党、青天白日滿地紅旗及び



国民政府の四条件が必須である、と言った。重慶を離れてより一年三カ月の努力のすえ、本日ついに天は人の願いに従ったのだ。まことに物事は人の努力次第である。……本日は余の生涯にとって一番に痛快な日である。けだし理想が実現することは人生にとって最も得意とすることであろう。」

3月31日の日記にも得意げにこう書いている。

「国民政府は遷都され、青天白日満地紅旗が石頭城の麓にたなびいているのは、まったく余一人の発起によるものなり。以後の運動もまた余が中心となる。」

但し、これを境目に傀儡政権は益々斜陽の一途を辿り、彼自身も日本・日本人に不信感を募らせ、絶望に陥って行く。日記から少しピックアップしてみよう。

1940年

4月11日 日本の中下層軍人はいまだに理解を欠いており、特に華北ではひどい、と述べる。このような状況では重慶と和を講じようとしても、重慶が応じようとしただけでなく、わが方もその主張をしない。中・日関係の鍵はやはり日本側にあり、日本側がこのようでは悲観するしかない。

5月17日 華北の日本軍の横暴さはまったく腹立たしい。善処するためには隠忍する他、手立てはない。

8月2日 今は山河破れ、戦災の光景のみが目に入り、民の生活を安堵させようにも何年の何時のことやら判らず、自身の将来がいかなる結末になるかも問題となっており、前途を考えると悪寒を覚えざるをえない。

11月25日 日本側がこのように認識不足なのだから、今回の事変が発生したのも不思議なことではないし、今後の合作もこれでは順調には進まなからう。

12月5日 世界情勢も二年前に比べ巨大な変動が生じた。今後どのように発展していくのか人力では予測のつかないことである。ただ日本の疲弊状況を観察するにつけ、重慶の見解が正当であって、われわれが謝っていたかのようにも思える。功罪の是非は目下のところ判断のしようがない。

1941年

1月1日 日本人の対処の拙劣さと認識の浅さはここからも窺える。

2月27日 中日事変後の私の観察の多くは間違っており、当初、拡大するには至るまいと確信していたが拡大して今日に至っている。その後、日本の軍事行動は重慶まで発展するに違いないと信じたが、日本にはもはやこれ以上進む力が無い。米日は妥協すると固く信じたが、アメリカは意外に強硬である。この他にもわが国に対する評価が低すぎ、日本に対する評価が高すぎたことも根本的な誤りであった。

3月8日 日本人の絶対多数は事情を理解していず、中日協力の必要性和その方法をわかる人はわずかに少数に過ぎず、これでは役に立つはずがない。中日の百年にわたる恨みはおそらく当分消滅出来なからう。

4月29日 日本軍部の中国に対する誤った認識は少しも改まっておらず、相変わらず自覚のないままであり、このような状況で事変の解決を主張しても、全面和平は南轅北轍の諺に等しい。

7月5日 中国人は日本について完全に信じることはできない。日本が事実でもって中国人を完全に信頼させるようにしていないため、この点からいえば、和平は実に難しい。これまで武漢、重慶にいた時、余は日本を高く評価し過ぎ、中国を見下し過ぎており、米国の動向についての認識もはっきりしていず、観察の誤りから和平運動が生まれた。ちょっとした過ちで一生取り返しのつかないことをしてしまった。

9月23日 日本人は少しでも隙を見せるとどンドン付け込んで来るので、実に対応が難しい。

1942年

1月1日 今年はいずれの分野でも必ず昨年より苦しくなり、一層対応が難しくなるに違いない。

9月17日 余は今回の運動がもし失敗するとすれば、それは次の二つの間違った認識に基づくであろうと言う。一、当時、日本軍は必ず重慶市及び西安、昆明等をも続けて占領すると思っていた。二、日、米あるいは日、ソ戦争は発生しないと思っていた。今ではこの二つの認識が共に間違っていることを知ったため、和平運動を失策と見なさないわけにはいかない。

11月9日 個人について言えば、いつかは万策尽きる日があるものと思うが、決して後悔はせず、ただ自害して国人に謝るしかない。

12月29日 わが政府の人材不足、意見の分岐を顧みるに、本当に公のために働く者は果たして何人いるのか。また汪先生の指導能力及び精神は誠に人を焦慮させる。

1943年

1月6日 汪先生が汪夫人に支配され、悪人どもに包囲され、私利私欲に走り、全体の領袖としての役割を失って行き、一派の領袖になり下がりがつつあるように見え、事業、前途に頗る悲観的となる。

7月9日 日本人の対中認識がこのように誤謬に満ちたものであるために、未だに事変の解決が立たないのである。

9月24日 中日基本条約にはあらゆるところで日本が中国を支配しまた分割しようとする意図が表明されており、とくに駐屯規定はその一であり、華北及び内蒙古等の地方の特殊化はその二である。

11月2日 日本側の中国の物事に対する無理解はこのことから判る。

1944年

1月6日 前途を思うと非常に心配になる。……天よ、中国を助けたまえ！中国人民を助けたまえ！

2月17日 本日、ますます嫌気がさし、心が乱れ、何事も手の施しがらないものに思われた。もしこの世を去ることができるなら、却って煩惱から逃れることができるのだが。道は進めば進むほど狭くなり、仕事はすればするほど難しくなり、別に消極的な考えを持つのを好んでいるわけではないが、やはり環境のなせる技である。

2月21日 先頃米軍はトラック島を襲撃し、日本側は事前に予知していなかったので損害甚だしく、二年前に真珠湾が襲撃された状況に似ているとのことである。

3月3日 内外の困難が重なり、対処する手立てがない。日本政府は中国の独立尊重、経済互

恵を声明してはいるが、事務当局、民間商人と産業家はまだ経済侵略思想を改めていず、嘆かわしいことだ。わが国の者が気儘に振る舞い、権利を争うだけで、時局の困難なことをまったくわきまえないことに至っては、泣こうにも泣けない。

5月3日 余の考えでは、世界大戦は外ではソ連に、内では共産党に機会を与えており、今後の世界はおそらく赤化されるであろう。

6月22日 近頃、欧州、アジア両方とも急転直下の勢いがある。

6月27日 ヨーロッパは今年、アジアは来年に、もしも意外な奇跡でもなければ、必ず絶大な変化が生ずるはずである。我々には局面を転換させる力なく、ただ座して暴風雨の来臨をまち、しかも犠牲となるのみである。世界情勢がこのように変化するとは、真に当初考えもしなかったことである。

6月30日 日本人の誤ちは、一つに中国に対する評価が低すぎたことであるが、これにはまだ言い分があろう。二つには米英に対する誤算で、これはいくら考えても解せぬことである。

7月22日 米軍は昨朝またグアム島に上陸したが、無人の地に入った如くであり、日本の防御力がこのように薄弱とは、実に意外なことである。

7月26日 日本は既に必勝の信念を失っており、特に海軍はそうである。

11月13日 逝きし者を悲しみ、残った者を思い、今後の苦難危機を考えると、天下がいかに大きくとも身を置く場所がないことを感ずる。

11月23日 汪先生に至っては、棺に蓋はされたが、その是非功罪を定めることはまだできず、今後の時局の推移を待たねばならなからう。

1945年

1月1日 三十四年が今日から始まった。別に感想などというものはなく、ただ生き延びるのみ。

6月8日 占師によれば余は来年不利であるとのことだが、おそらく余の一生で最後の誕生祝いの日となることだろう。

周仏海の一生は波瀾万丈の50年であった。20代はマルクス主義に走り、中国共産党の創立にまで参加し、30代は三民主義を信仰し、国民党政権下でその著述及び宣伝に没頭し、40代は和平運動に身を投じ、日本軍占領下で、汪兆銘傀儡政権の中堅になり、東奔西走した。それだけでなく、南京に身を寄せながら、こっそりと重慶と連絡を取り、軍事委員会調査統計局長の戴笠から相当信用されていた。行為行動、主義主張、立場・観点・方法から言って、彼は左から右、愛国から売国と、急転直下、カメレオン以上に変身が速い。オポチュニスト、日和見主義者と言われる所以である<sup>15)</sup>。

彼は「自反録」という短文で自己解剖して、次のように自己評価している<sup>16)</sup>。

自分には根気というものが全然ない。自分は実直そのものの人間である。記憶力はものすごく悪い。人を使う時はその人を疑わず、全部任せる。疑うのなら始めから使わない。人を騙さず、権謀術数をめぐらさない。お人好しで、何か頼まれたら断れない。興奮し易いのが最大の欠点であるが、仕事は素早くやり、決断も速い。やると言ったらやり、失敗しようが、傍らから何を言われようが、損をしようが、動じず、最後までやり通す。責任感に強いというのが自分の天性で、

労苦を厭わず、非難を気にせず、国のため民のために尽くす。生活は質素で、交際もあまり好きな方ではない。

周仏海の言動を見れば分かるように、彼は確かに才子肌のタイプで、頭がよく、機転が利く。但し、いくら彼であっても、千変万化する国際情勢、その動きと前途を読むことはできなかった。米英仏がどう出るか、ソ連はどちらに付くか、日独伊がどこまで組むか、客観的な観察と正確な判断は容易なことではないが、彼には最小限の見通しさえできなかった。日本と中国の国力の比較研究も功を奏さず、人・物・組織、どれを取っても、中国は日本に負けるという結論に達した。増長しつつあるナショナリズムの奔流、儒教が骨身にまで染み込んでいるだけでなく、近代化にも目覚め始めた中国国民の異民族・外敵に対する嫌悪感、特に抗日・排日のしぶとさとその強さが彼の目には入らず、見えなかった。更に、日清・日露戦争以降、二十一か条要求の提出、満州事変・満州国の樹立、第一次上海事変、内蒙古・華北への進出等々の歴史や事実から教訓を汲み取り、日本の対中国の方針・政策を正視しなかった。勿論その裏には中国が共産党にとられるなら、いっそのこと日本に渡した方が増しだという考えも見え隠れしてはいるが。このような基本的なところで、彼は全面抗戦を主張する毛沢東を始めとする共産党或いは郭沫若を代表とする左寄りの文化人どころか、日本の石原莞爾<sup>17)</sup>にさえ及ばなかった。

「北支那の軍権我に帰し、進んで漢口を攻略することが出来たととしても、蔣政権の覆滅は望み難いし、仮りに蔣政権が倒壊しても、全土抗日の気運は断じて解消することはないであろう。

辺疆にわずか尺寸の国土が存する限り、国民党を中心に長期に亘り、我に抵抗するであろうことは、疑いを容れないところである。このような場合、漢民族の抵抗が意外に強靱なのは、歴史の教えるところである。

したがって武力の絶対を盲信し、速戦即決主義によってこれを屈服しようとするのは、四億の民と近代的装備をもつ支那を、土民国のエチオピアと同一視しようとする誤りを犯すものである。

対支戦においては、戦局は必ずや長期化し、単に武力だけでなく政治、経済の総合的持久戦となるであろう。

支那を徹底的に屈服させようとするれば、数十個師団の兵力を数十カ年に亘って、異境に使用するという難事を遂行し得る自信がなければならない。

もしこの覚悟がなければ、たとえ一時の戦勝を得たとしても、支那は十年ならずして国力を恢復し、再び事を構えるようになるであろうことは、第一次大戦後のドイツの先例に見ても明らかであろう。」

周仏海は間もなく自分の間違いに気が付くが、時既に遅しで、どうにもならず、運命に身を任せるしかなかった。そして、結局は悲劇で幕を閉じるのである。日本観に就いて言えば、日本の国力を過大評価し、日本政治・軍事・軍部の本質を見抜けず、心から好きでもない日本人と手を組み、最後は不信感に陥り、ますます嫌いになってしまうといったところである。

## 註

- 1) 益井康一、漢奸裁判史、みすず書房、1977年4月、227ページ。
- 2) 同1)、246ページ。
- 3) 同1)、248ページ。
- 4) 同1)、229ページ。  
王曉華等、国共抗戰大漢奸（下篇）、中国档案出版社、1995年12月、235ページ。当該書では、初公判は11月2日になっているが、間違いであろう。
- 5) 同1)、242ページ。
- 6) 白井勝美、現代史資料（13）、日中戦争（五）、みすず書房、昭和41年7月、251ページ。
- 7) 同6)、249ページ。
- 8) 同6)、376ページ。
- 9) 青地晨編、現代日本記録全集19、大陸を駆ける夢、筑摩書房、1969年2月、259ページ。
- 10) 日本国際政治学会、太平洋戦争原因研究部編、太平洋戦争への道、開戦外交史4、日中戦争〈下〉、朝日新聞社、昭和38年1月、217ページ。
- 11) 防衛庁防衛研究所戦史室、戦史叢書支那事变陸軍作戦〈3〉—昭和十六年十二月まで—、朝雲出版社、昭和50年11月、44ページ。
- 12) 周仏海、中国現代自伝叢書、第三輯2、周仏海回憶録、龍文出版社股份有限公司、民国82年3月、97ページ。
- 13) 同1)、310ページ。
- 14) 蔡徳金編、村田忠禧等編共訳、周仏海日記、みすず書房、1992年2月。
- 15) 岡田首次、日中戦争裏方記、東洋経済新報社、昭和49年3月、332ページ。
- 16) 周仏海、往矣集、民国叢書、第一編、99、総合類、上海書店、103ページ。
- 17) 今岡豊、石原莞爾の悲劇、芙蓉書房出版、1999年8月、440ページ。

## 提要

周佛海的一生是坎坷的五十年。年輕時，留學日本，就讀于京都大學。傾向馬克思主義，還參加了中國共產黨的創建工作。后又信奉三民主義，從事其研究與宣傳。日中戰爭爆發后，隨着戰火從華北急劇蔓延到華中，華南，他悲觀失望，過高估計日本的國力，認為無論是人力，還是物力，組織，都遠遠及不上日本。同時，國際形勢也對中國不利，中國處于孤立無援的狀態。為了救中國，只有求和。于是投身汪精衛的和平運動，積極籌建日軍佔領區的傀儡政權，成為名副其實的大漢奸。不久他就覺察自己判斷的錯誤，上了日本人的當，後悔莫及。在罪惡的泥坑里越陷越深，不能自拔。最后的掙扎也無濟于事，瘐死告終。

